

一度は源氏の手中にありながら、突如として源氏の手の届かない世界に去った母夕顔の運命と共通すると思われる。玉璧もまた、源氏の手中にありながら、彼のものとならず、源氏に限りない悲哀を残して彼のものから去ったからである。

源氏物語の聖

本稿では、聖関係のことは――聖・聖立・聖心地・聖心・
 聖様・聖言葉―の用例点検を通して、源氏物語の聖について
 考えてみようと思つた。

注

(岡山大学大学院文学研究科)

聖のもともとの意味は、神に近いすぐれた人ということで、その意味から、儒教的には聖人・高德の人・天皇（の尊称）となり、道教的には神仙・達人の意となり、そして、仏教的には高德の僧の意となったようである。

として、高德の人（一例）・天皇の尊称（一例）・高德の僧・特に釈迦の弟子（三例）というような用例は除くことができよう。そのほかの用例は一応三つに分類できる。その一は、「かしこきおこなひ」との北山聖（若紫巻）と葛城聖（柏木巻）。その二は、在俗の人物である宇治八宮と薫。その三は、主要な法師たち―末摘花の兄の醍醐阿闍梨（蓬生・初音巻）・冷泉帝に出生の秘密を告げる夜居僧都（薄雲巻）・一条御息所の祈りの師の小野律師（夕霧巻）・宇治八宮一家とかかわる宇治阿闍梨（橋姫・宿木・蛸蛉巻）・浮舟の出家問題にからむ横川僧都（手習・夢浮橋巻）。この三分類である。まず、この分類に従ってそれぞれの用例を点検していきたい。

1

北山聖と葛城聖は「かしこきおこなひ」とである。彼らはそれぞれ源氏と柏木の加持をする。源氏物語の中で、加持祈禱をする者はだいたい「夜居の加持の僧」「祈りの師」「加持の僧」「験ある僧」「験者」などと言われていて、「おこなひ」と称されるのは彼らふたりだけである。「おこなひ」との用例は、このほかにならずか一例で、「おこなひ」とも「おこなひ」というのも一例だけしかない。「おこなひ」とのその一例は、源氏が明石入道のわが娘に託す悲願を知って彼のことを思う場面で、「さるべきにて、しばしかりそめに身をやつしける昔の世の行ひ人にやありけむなど思しめぐらすに、いとど軽々しくも思されざりけり」（若紫下巻。引用は日本古典文学全集本による、傍線筆者、以下同じ）と記されているものである。これによれば、「おこなひ」というのは微いの念を抱かせるもの

のようである。「おこなひ」との用例は、「四季にあててしまふ御念仏」のために宇治阿闍梨の寺に七日間参籠した八宮のもとへ薫からの贈り物が届く場面に、「山籠りの僧ども、このごろの嵐にはいと心細く苦しからむを、さておはしますほどの布施賜ふべからん、と思しやりて、絹綿など多かりけり。御行ひはてて出でたまふ朝なりければ、行ひ人どもに、綿、絹、袈裟、衣など、すべて一領のほどづつ、あるかぎりの大徳たちに賜ふ」（橋姫巻）と記されているものである。ここでは「山籠りの僧ども」がすなわち「おこなひ」とも「おこなひ」とであるから、それは山の寺で修行に励む大徳を指すものと思われる。俗塵を離れて山林で修行する行者、修行者が、「おこなひ」とであり、そうした山林修行で鍛えた験力に寄せられる俗世からの期待に応えようとする者に、その期待から与えられたらしいのが、「験者」という呼び名である。同じく加持祈禱をする者でも、験力よりもその修行ないし修行態度に意味のある者が、特に「おこなひ」と言われていると考えられる。

「おこなひ」とは、俗世間を離れて山林で修行に励む者である。その山に臥すという修行態度から、「山臥（山伏）」ということばも出てくるのであるが、彼らは通常貴族社会から距離を置いて見られていて、それだけに超人的なものに対する期待と違和感とを持たれていた。貴族社会から離れたところに意識されていた彼らが、験力を頼りにされて験者として貴族社会に召されるのは、貴族社会の験者という験者が試みてどうすることもできなかった場合で、しかも貴族社会への登場はある「人」の紹介によった。いつもは山林深く籠って修行に励んでいる者―「おこなひ」とが「聖」であり、そ

の彼らがある時驗者として貴族社会に召された姿が「聖だつ驗者」(柏木巻)である。

「聖」一般に向けてられる期待と違和感は漠然としたものであるが、「聖」個々人に接して初めて、それが具体的なものになる。北山聖は「いとたふとき大徳」(若紫巻)であった。葛城聖は「けにくく心づきなき山伏」(柏木巻)であった。北山聖は「かれたる声の、いといたうすきひがめるも、あはれに功づきて、陀羅尼」を読み(若紫巻)、葛城聖は「丈高やかに、まぶしつべたましくて、荒らかにおどろおどろしく陀羅尼」を読む(柏木巻)。

「峰高く、深き岩の中」に身を置き(若紫巻)、深山に籠り(柏木巻)、公に用いられず(若紫巻)、「世にも聞こえず」(柏木巻)、修行に励み、「おこなひびと」と言われる、北山聖と葛城聖。それが聖である。

2

宇治八宮と薫は在俗の人物である。八宮は、世の中に見捨てられ、心の支えの北の方を失い、かりそめの相手である中将の君に女子(浮舟)が生まれたことを知った時、世の中を見捨てたいと思った。妨げるものは、北の方の形見となったふたりの姫君たち(大君・中君)だけであったが、それは決定的な妨げであった。「よりつかむ方なきままに、持仏の御飾ばかりをわざとせさせたまひて、明け暮れ行ひたまふ」(橘姫巻)のであるが、かたちをかせないまま「年月にそへて世の中を思ひ離れつつ、心ばかりは聖になりはてたまひて」(同上)という状態であった。源氏物語における出家につい

ては、ここでは触れることを避けたいが、八宮の道心について言えば、純粹に宗教的であるとも、徹しきれたものであるとも言えないところを持っている。薫の感想として「いとこよなく深き御悟りにはあらねど」(橘姫巻)と述べられているように、深い悟りはなく、結局出家もできず、また、死後の願いも果たされなかった。その彼が、源氏物語の中で、「心ばかり」の「聖」、「儚聖」(橘姫巻)、「おほかた聖にならせたまひにける」(宿木巻)というような表現で、条件付きの聖の資格を与えられている。

まず、その条件について考えてみると、それは、八宮が優婆塞であるためにわざわざ付けられなければならないかったもののように思われる。優婆塞八宮が単に「聖」と言われる場合は、聖の生活をしている者という意味においてである。次に、資格について考えてみよう。深い悟りもなく、徹しきれた道心もない聖であることからして、「目蓮が、仏に近き聖の身にて」(鈴虫巻)と言われる場合の「聖」と述べていることは明らかである。実は、それが源氏物語の聖なのである。「よろづを思ひ棄て」(橘姫巻)で「明け暮れ行ひたまふ」こと、それが源氏物語における聖の資格なのである。八宮の法の師宇治阿闍梨に「心深く思ひすまはるほど、まことの聖の掟になむ見えたまふ」(橘姫巻)ということが見える。また、冷泉院のおことばに対し八宮が「聖の方をば卑下して聞こえなしたまふ」(橘姫巻)とあるが、それは「あとたえて心すむとはなけれど」(同上)と詠んだ部分のことで、つまり、「聖の方」とは、「あとたえて心すむ」八宮の「行ひ」の日々のことである。俗世を思い離れて仏道修行に励む態度を「聖」と捉えているのが、源氏物

語の聖である。

なお、聖と言われる人たち—今までの考察の範圍では北山聖・葛城聖・八宮—が、俗世を思い離れる具體的姿として、場所的に俗世を離れた所—山林・山里—によく置かれているが、彼らは、そうだから聖なのではなく、聖だからそうなのでもあるのである。八宮は、場所に関係なく—都の邸に在る時にすてに、その生活ぶりから「聖になりはてて」（橋姫巻）と言われている。それによりふさわしい設定ということで、都の邸焼失以後の宇治の山里住まいという舞台が出てくるという手順である。

さて、蕨はどうかと言つと、彼は「道心にすす」（浮舟巻）んだ「道心深げ」（橋姫巻）な人物として、俗世間にあつては「聖だつ」（浮舟巻）人と受け取られている。恋のことなど思わぬという蕨のことは対して、匂宮が「例のおどろおどろしき聖」（詞）（橋姫巻）と言つ。蕨自身も俗世間との距離を自認なり自負なりしていて、「聖になりし心」（蜻蛉巻）という自覚を持ち、「深き山に住みはて」（同上）たいと思つていた。「世の中を思ひ離れてやみぬべき心づかひをのみならひはべし」（宿木巻）というような、「本意の聖心」（同上）の持ち主であつたわけだが、ただ、彼は、その「本意」を結局八宮ほどにも実行できなかった。この点、「聖」という線では、さしずめ蕨は八宮の前段階にとどまっていると言える。

3

主要な法師たちは、それぞれ「聖」「聖だつ」と言われているが、最初に、醍醐阿闍梨について、「同じき法師といふ中にも、たつき

なく、この世を離れたる聖にものしたまひて」（蓬生巻）と記されている。ここでは、「たつきなく、この世を離れたる」というところに、「聖」のなんたるかがよく語られている。

夜居僧都については、「この入道の宮（藤巻）の御母後の御世より伝はりて、次々の御祈禱の師にてきぶらひける僧都、故宮にもいとやむごとなく親しき者に思したりしを、おほやけにも重き御おほえにて、厳しき御願ども多く立てて、世にかしこき聖なりける」（薄雲巻）と記されている。ここからは、彼が祈りの師として信頼されていたらしいことはわかるが、彼が聖であるということについての説明は得られないように思われる。そこで、もう少し読み進めると、冷泉帝にその出生の秘密を告げようとしたこの夜居僧都が、事のあまりの重大さに口籠った時、冷泉帝が「何ごとならむ。この世に怨み残るべく思ふことやあらむ。法師は聖といへども、あるまじき横さまのそねみ深く、うたてあるものを」（薄雲巻）と思うところがある。これは少々手厳しい法師批判であるが、その中の「聖といへども」という言い方は、「聖」が最もそれらしくないものだということを示すものにはかならない。つまり、俗世を離れた法師である。この「聖」の解明から、先の「聖」を理解することができるのではないだろうか。冷泉帝は夜居僧都の口籠りを目の前にして、「聖といへども」ということを頭に浮かべる。これは口籠りの本人夜居僧都に無関係のものではあるまい。夜居僧都は「聖」だといふことがまず言われ、そんな「聖といへども」と続くわけで、ではどんな法師かというと、俗世を離れた法師だということがわかるのである。

小野律師については、「いと聖^{いとし}だちすくすくしき律師にて」(夕霧巻)とあり、宇治阿闍梨については、「聖^{いとし}だちたる阿闍梨」(橘姫巻)と書かれている。「聖^{いとし}だち」ということは、世間離れ^{よこしま}していて、一本気で、誠実で、力んで仏の道に忠実な、そんなふたりのようすが端的に表わされている。

横川僧都の場合には、「聖心」というのが問題になる。妹尼が僧都について述べる「僧都の御心は、聖といふ中にも、あまり限なくものしたまへば、まさに残いては聞こえたまひてんや」(夢浮橋巻)という部分の「聖」の用例も、「聖心」の用例と同じように考えられよう。浮舟が出家を願って「いみじう泣きたまへば、(僧都は)聖心にいとほしく思ひて」(手習巻、彼女を出家させた。この「聖心に」については、「さすが聖僧の心には」「法師の心として」というような解釈があったり、一見「聖僧の慈悲心に」かと思われたりするが、他の用例の検討とも合わせて考えてみなければならぬ。い。

明石入道に關して、「かの明石にも、かかる御事」(「若宮誕生の事」)伝へ聞きて、さる聖心地にもいとうれしくおぼえければ」(「若菜上巻」とか、「いかでさる山伏の聖心に、かかる事ども」(「娘の出世に夢を託しての願ひ事」)を思ひ寄りけむ」(「若菜下巻」とか記されている。北山僧都、夜居僧都がそれぞれ、「世を棄てたる法師の心地にも、いみじう世の愁へ忘れ、齡のふる人の御ありさまなり」(「若菜巻」)、「源氏と藤壺とのことは、法師に縁のない男女の間のことであり」くはしくは法師の心にえさとりはべらず」(「薄雲巻」)と自ら語っているが、そのように世を捨て俗事を離れた法師の心が

聖心であろう。明石入道の場合も、そういう聖心ながら、俗事に心を動かしているという面が特に語られているのである。宇治阿闍梨はその仏道に忠実な心から、八宮の死の前後に、八宮と姫君たちそれぞれに対して、いまだら会って執心を残すようなことはなさいますなと厳しく諭すが、そのような阿闍梨の心は姫君たちから「あまりさかしき聖心」(稚本巻)と見做されている。人情を離れ仏道に徹した(姫君たちから見れば徹し過ぎた)心である。在俗の人物である源氏や薫の場合の「聖心」は、「世を思ひ離るる心」(明石巻)であり、「世の中を思ひ離れてやみぬべき心づかひ」(宿木巻)である。この類のこととしては「道心」というのが使われているが、その關係は、たとえば岡崎義恵氏が「道心を起して道に入れば、そこに聖心が生ずるのである」と言っておられるごとく、仏の道に志す心と仏の道でめざす心とも言えるもので、特に後者において意識されるのは、世の中を思い離れるということである。

そこで横川僧都の場合だが、「聖心にいとほしく思ひて」の「聖心に」というのも、「聖心にも」「聖心ながら」という意味で、人の情を越えて説かれる仏道、その仏道に徹した心にも、と考えられるものではないだろうか。そして、そのような「聖心」とは、また、仏の教えのままに、物事にこだわることなくそのありのままを受け入れる、「限なくものしたま」う心なのである。

以上、源氏物語の聖について、最初の三分類に従って一通り見てきたが、そこからは次のような特徴が考えられる。源氏物語の聖は、仏教的な聖で、俗世を思い離れて仏道修行に励む出家人である。仏

の道に徹した出家人が意識されていて、特に、俗世を思い離れるということに視線が注がれている。その点、仏教的な聖のその精髓だけが扱われた聖であると言え、また、深き山に跡絶えるというような道教的神仙の神秘性も取り込んでいると言えよう。

二

さらに、源氏物語の聖は、当時の現実の安易な敬慕ではなく、現実を踏まえた上でより本質的に描かれた聖である。

当時の現実では、特に国家体制内の仏教者に対するところの体制外の宗教者に聖の名が見える。その内容は多種で、「日知り」ということは語る民族宗教的な山岳呪術宗教のものから、仏教本来の姿を求めて体制外に出た仏教者までを含んでいる。「日知り」というのは、原始信仰で山を背景に活動していたシャマンの流れが山間に住む毛坊主といった体の優婆塞につながるところに共通する、予言をなし得る有識者としての性質から、日を知るという意味で生まれた呼称で、その呼称が、優婆塞の中でも、とりわけはつきり山林修行をしてくるようなすぐれた者に対して使われるようになったとも言われる。体制外に出た仏教者とは、世俗化、貴族化する仏教界にあって、仏教本来の学問修行を志して大寺院の機構を離れた遁世——文字通り世を捨てること——の行者のことである。

こうした聖は仏教説話などに姿をとめているが、権門勢力に對峙して積極的に俗世を拒否する態度でその脱俗性を語っているのは、遁世の行者という聖である。俗世を思い離れるという聖の精髓をその中核とする源氏物語の聖においても、現実の聖としては特に

この遁世の行者という聖が意識されている。たとえば、優婆塞八宮はあくまで聖ではなく俗聖として具象化されている。現実の聖を蒸留して得た聖の純粹体に物語の中で再び現実化の装飾を施した時、優婆塞八宮は、現実には存在した優婆塞のヒジリに重ならず、全く別の枠内で具象化されたのである。このような現実化の装飾は純粹体を生かす方向でのみなされており、その唯一の実践が遁世の行者という聖観の導入である。

源氏物語の聖の造型の基盤には、聖の本質の理想性を具現したいという作者の熱意があつて、法師の価値要素の一つに聖化がある。権門勢力がすべてであつて表面的にはそれに対峙する立場などないという、この物語の扱う世界の中で、そうした物語自体の拘束力に圧迫されることなく、作者の熱意は自由である。官僧であるにもかかわらず、人物的に評価する場合には聖だと言いきる。そこに準ずる人物であれば、在俗の人物であっても聖だと言いきる。ここで、このまま作者の熱意だけが躍動していたならば、源氏物語の聖像は観念的な虚像になりさがっていただろう。ところが、源氏物語の聖像は現然として生きた実像である。作者の熱意は賢明であつた。破壊への自由ではなく、建設への自由を選んでゐる。物語自体の拘束力に對し、破壊的な抵抗の姿勢ではなく、有効的な適応の姿勢をとっている。それが、遁世の行者という聖観を導入しての現実化の装飾である。この現実性によって、初めて、源氏物語の聖は地に足をつけているのである。

その現実化の装飾は、実に巧妙になされている。公に用いられず、「峰高く、深き岩の中」で修行に励む北山聖や、「同じき法師と

いふ中にも、たづきなく、この世を離れたる聖にものしたまう醍醐阿闍梨には、遁世の行者の面目がよく伝えられているが、このふたりの源氏物語の聖にはその扱われ方に微妙な違いがある。北山聖は、「峰高く、深き岩の中にぞ、聖入りゐたりける」といふ言い方で、突然「聖」と言われる。この場合の「聖」は一種の呼称であり、官位などで人を呼ぶのと同類である。これに対し、醍醐阿闍梨は「聖にものしたまひて」と言われる。これは状態を説明する形容の語である。つまり、北山聖は存在そのものが聖である人物で、醍醐阿闍梨は存在のし方が聖である人物なのである。聖という人物と聖の人物と言ってもいいだろう。前者には葛城聖が、後者には主要な法師たちが、それぞれあてはまる。葛城聖は、「この聖も、丈高やかに、まぶしつべたましくて」といふ言い方で、北山聖と同じく突然「聖」と呼ばれる。主要な法師たちでは、まず、夜居僧都が「世にかしこき聖なりける」と言われているが、これは醍醐阿闍梨の場合と同じく状態の説明である。小野律師と宇治阿闍梨はそれぞれ「聖だつ」律師であり阿闍梨である。横川僧都はその心の状態を聖のそれと言われている。この描き分けの境は、彼らが体制内外のどちらに立っているかということにある。主要な法師たちはすべて僧都・律師・阿闍梨・禪師という國家体制内の法師であり、北山聖と葛城聖は公に用いられず、「世にも聞こえ」ない体制外の法師である。この巧妙な描き分けによって、遁世聖の現実が源氏物語の聖に生きているのである。

聖的人物と言えば、八宮と薫もその仲間に入る。彼らは、その心のあり方を「聖」と言われ、そして「聖だつ」人と言われている。

聖的、^一という言い方ではっきり区別することを前提として、聖のイメージが、仏道修行の方面における一般的な人物評價の一つの評価項目になっていたことが考えられる。聖的人物が「聖」と呼ばれる場合もあるが、それは「聖だつ」様の人物に適當な呼称という以上の意味を持たない。まず「おこなひびと」と言われ、次にいきなり「聖」と呼ばれ、以下ほとんど「聖」と呼ばれる北山聖が、「いとたふとき大徳なりけり」と説明された直後だけ一度「大徳」と呼ばれる、あれである。具体的には、八宮が地の文で「かの聖」（権本巻）、横川僧都の妹尼のことばで「かの聖の親王」（手習巻）とされる場合と、宇治阿闍梨が「聖の坊より」、「雪消えに摘みてはべるなり」とて、沢の芹、蔭など奉りたり（「権本巻」という地の文で「聖」とされる場合が挙げられる。宇治阿闍梨の場合、うち続く彼から八宮の姫君たち（大君・中君）への贈り物の場面の描写において、「阿闍梨の室より、炭などやうの物奉るとて」（同上）という表現との重複を避ける配慮から、「聖だちたる」様の法師に適當な呼称として使われたものと思われるが、また、「沢の芹、蔭」が聖のイメージにつながる点も注目される。

三

源氏物語の聖は、このような本質的聖である一方で、物語の独自性において物語作者の意志を具現した聖である。

権門勢力がすべてであつて表面的にはそれに対峙する立場などないという、この物語の扱う世界の枠については先にも触れたが、その世界にあって、権門勢力に対峙して積極的^二にこれを否定するよう

な聖が登場しないのは当然のことである。その権門との協調が詔いからではなく仏の道に徹した上での信念からなされる聖の登場がせいぜいである。一例を挙げると、北山聖と、ある意味でその説話版とも言えそうな信濃の国の聖との比較によって、その世界の一端が窺える。効験の褒美に帝から与えられようとする官職等に対して、信濃の国の聖は、「僧都、僧正、さらに候ふまじきこと。またかかる所に莊など数多寄りぬれば、別当、なにくれなど出で来て、なかなかむつかしく、罪えがましき事いで来。ただ、かくて候はん」とはつきり辞退の意を示して、そのまま終わる。それが、北山聖の場合には、何も語られていない。むしろ、「主上のお耳に達したのだから、あの、現世を思わない上人に、現世の榮誉がおしつけられることであらう。これも光る源氏の功德の一つである。朝、下山する時の数々の賜わり物では終わらないのだ」という見方も生まれる状況なのである。物語の枠、拘束力について、先に、作者のある熱意がそれに対して有効的な適應の姿勢をとっていると述べたが、作者自身にとって、この物語の枠、拘束力はいったいどのようなものであったのだろうか。

その、真の求道者としての純粹な力強さ、自由さ、脱俗性が、敬意を伴って源氏物語の聖に導入されている、当時の遁世の行者の中で、代表的な遁世聖と言え、増賀聖である。この聖は奇行で有名なが、このような話もある。

入道（＝宗正）、『宮ヨリ御消息ヲ給ハセタレバ、和讃ニ、此ク成タル身ナレドモ、悲シク思エ侍ル也』トテ泣ケバ、聖人（＝増賀聖）目ヲ皖ノ如ク見成シテ、『春宮ノ御消息得タル人ハ仏ニ

ヤハ成ル。此ク思テヤハ頭ヲバ剃シ。誰ガ「成レ」トハ云ヒシゾ。出給ヒネ、此ノ入道。速ヤカニ春宮ニ參テ坐シカレ」ト糸いと半無ク云テ追ケレバ（『今昔物語集』卷第十九「春宮藏人宗正出家語第十」。引用は日本古典文学全集本による、傍線筆者以下同じ）

出家した元春宮の藏人宗正が春宮からの歌に接して涙するのを見て、そんな未熟な道心で出家したのかと激怒したというのである。この話の中で、増賀聖も増賀聖なら、宗正もまた、肉親を振り切って出家したもので、このでき事の後も「遂ニ道心退スル事無クシテ、數ニ貴ク行テゾ有ケル」という状態であった。そういうふたりの姿は、仏教説話の世界のものであって、物語の世界のものではない。

源氏物語における、あるいは紫式部における、出家と肉親への愛（人の情）という課題は、源氏物語の主題にかかわる重要な問題である。淵江文也氏は「源氏物語作者の思惟」の中で、「出家することと妻子供族への愛執との矛盾の課題——これは此物語中にも紫式部日記にも見えて、作者の思弁性を考える好手がかり」と述べておられる。また、源氏物語には、出家しきったようである人の情（特に子などへの愛情）を捨てきれない三人の父親、明石入道・朱雀院・宇治八宮が描かれており、その扱われ方も、源氏が明石入道を「いかでさる山伏の聖心に、かかる事どもを思ひ寄りけむと、あはれにおはけなくも御覧」（『若菜下巻』）じ、薫が八宮に道心の理想を感じ取る（『橋姫巻』）というものになっている。浮舟のための眞の救いをめざしてその処遇について最後まで苦慮する横川僧都の造型

も、この問題意識あつてのものと思われる。源氏物語には、前掲の「和機ニ、此く成タル身ナレドモ、悲シク思エ侍ル也」と涙した正宗のような場合はあつても、そういう正宗を「春宮ノ御消息得タル人ハ仏ニヤハ成ル」と叱りとはした増賀聖のような人物はいない。仏の道に徹し（内からではなく外からであるが）、八宮や姫君たちに厳しい論しを行なう宇治阿闍梨でさえ、「さすがに物の音めづる阿闍梨」（橋姫巻）と言われる。「声は嘎れて怒りたま」い、「すくすくし」くて、「ゆくりもなく」話を出して「頭をふりて、ただ言ひに言ひ放」つ（夕霧巻）、あの小野律師にしても、一本気からの単純で一方的な忠告はできて、「春宮ノ御消息得タル人ハ仏ニヤハ成ル」というような痛烈で皮肉めいた言い方はできない。増賀聖の激しさは、物語の世界のものではないのである。

増賀聖とはほ同時代に、横川の源信僧都がいる。彼は、母尼に増賀聖のようになれと注意されて「聖の道」に励んだという。「聖の道」とは、この場合、名利・俗世を捨ててひたすら仏道に勤しむ道であつて、その限りにおいては源氏物語の聖にそのまま通じている。が、彼が「僧都ニ被成」たものの「道心深キガ故ニ、偏ニ名聞ヲ離レテ、官職ヲ辞シテ遂ニ横川ニ籠居」たのに対して、源氏物語では、いくら聖的人物の官僧でも、きっぱり官職を辞するといふようなことはしない。源氏物語の聖に通じているのは、徹底的に権門勢力に対抗した激しい増賀聖でもなく、きっぱり官職を辞した源信僧都でもない。増賀聖をめざして「聖の道」に励んだとされる話の中の源信僧都である。この選択には、作者の意志がかかわっている。作者は、物語世界の枠に圧迫されていたというよりは、自ら

その世界の内にあつて、その中で積極的に物語作者の意志を働かせていたと思われる。そうして描き出されたのが、他のどの世界のものとも違ふ物語の世界である。作者は、物語の中で、自分の意図する聖像を語っている。

源氏物語で聖とされる人物は、あるいは山籠りと言われ、あるいは山伏―単に山に住む状態を指す場合もある―と言われて、例外なく山に結びつけられている。「聖心地」「聖心」という二つの用例が見られる明石入道も、自他ともに認める山伏である。この山籠りは、出でじの寮いで山に籠るものでありながら、源氏物語の聖的官僧はその寮いを守りきらない。これは、説話世界の単純な厳格さの魅力を基準にしたら、はるかに下位の断を下されるものだろう。そうである理由を官僧であることに求めると、それは作者が物語の枠に圧迫された結果ということになる。しかし、そうではないのであつて、それこそ、物語作者の意図する聖像の具現にほかならないのである。

作者は語っている。「愛宕の聖だに、時に従ひては出でずやはありける。深き契りを破りて、人の願ひを満てたまはむこそ疎からめ」（東屋巻）と。誓いを守りきらずに山を降りることは、権門貴人のためだけでなく、母や名もなき女性（浮舟）のためにも決行される。それは、相手を選んでの奉仕ではなく（母の場合は親ということによる特別の理由が加わってくるが）、真の仏の意志として人を救うための行動なのである。たまたま権門貴人のためという場合だけを語られる聖的官僧もあるが、そこに働いているのも物語の拘束力ではなく前述の作者の意志であらう。ところで、前掲のそのことば

は、宇治に籠る弁の厄に浮舟への仲介を頼む蕉の口を通して語られるもので、そういう意味では、蕉の我田引水の言い分であって、作者の冷静な意志表示とは見做し難いと言えなくもない。ところが、源氏物語の聖はすべて、これを実行しているのである。その場、その時のことばと見れば、なるほど蕉のことばでも、これは実は、普遍的根源的には、聖造型における物語作者としての確乎たる一指针を語る作者のことばであつたと思われる。

四

源氏物語の聖は、人物表現の上から言えば、現実を踏まえた上でより本質的に、物語作者の意志を具現した聖である。では、そういう聖を描いた作者の真意は、いったいどこにあつたのであろうか。作者は、仏の真の救い、人生の救いというものを模索しているように思われる。もちろん在俗の立場である。人生の救いとは、仏の真の救いとは、法師は救いにいかに関与すべきか……と。作者の頭には、俗世を思い離れること、俗世を離れて仏道に励むことが、憧憬されている。そして、そのむずかしさが縷々綴られて、物語が展開している。人間の心の最も自然な落ち着き所は、というのが、作者が最後まで問い返し続けている問題である。

人間が生きていることは、という根源的問いかけが、源氏物語世界の奥を深くしているが、源氏物語の聖もまさにそういう問いかけの中で造型されていると言える。

注

- (1) 日本古典文学全集「源氏物語」第六巻（昭和51年）
- (2) 玉上琢弥氏「源氏物語評釈」第十二巻（昭和43年）
- (3) 岡崎義恵氏「光源氏の道心」（『源氏物語の美』昭和37年）
- (4) 速水侑氏「平安仏教の展開」・村山修一氏「修驗道の成立」・大隅和雄氏「遁世聖の系譜」（『日本思想史の基礎知識—古代から明治維新まで—』昭和49年）
- (5) 和歌森太郎氏「山伏」（中公新書・昭和39年）
- (6) 丸山キヨ子氏は、「僧侶像」（『源氏物語の探究第二輯』昭和51年）の中で、「官僧でも『聖』のイメージを持つ」と述べておられる。
- (7) 「源氏物語大成」によると、河内本の七家源氏・高松宮家本・尾州家本、別本の国冬本には、「沢の芹、峰の嶽」（傍点筆者）とある。
- (8) 「僧濃の國の聖の事（仮題）第六十五」（日本古典全書「古本説語集」）
- (9) 玉上琢弥氏「源氏物語評釈」第二巻（昭和40年）
- (10) 淵江文也氏「源氏物語作者の思惟」（『國語國文』昭和28年6月）
- (11) 「今昔物語集」巻第十五「源信僧都母尼往生語第三十九」
- (12) 「今昔物語集」巻第十二「板川源信僧都語第三十二」（岡山大学大学院文学研究科）